

東亜同文書院『大旅行誌』にみる二つの土人像：
第18期生の調査日誌における
仏領インドシナと中国の記述

Two types of Primitives in the Great Journeys of Toa Dobun Shoin College:
Analysis of “Dojin” category in its travel diaries of French Indocina and Mainland
China published in 1921

岩田晋典

IWATA Shinsuke

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: shinske@aichi-u.ac.jp

Abstract

This paper examines how Toa Dobun Shoin College students described the Dojins they encountered during the journeys, focusing on three field tours conducted in 1920, which travel diaries were published in 1921 as vol. 13 of the Great Journey Journal series. *Dojin* (土人) is a term used throughout Japan's modern history in order to designate “primitives” or “uncivilized aboriginals” in the periphery of its imperial territory. The analysis indicates that there are two types of *Dojin* concepts: one is the savage or primitive people exhibited as bizarre exotics in front of colonial gaze. As usual cases of colonialism/orientalism, they were thought to be civilized and liberated by Imperial Japan against the West. The other is rather based on the cultivated/uncultivated dichotomy. It is similar to mandarin/dialect distinction and the term were used to demonstrate ordinary people on country sides, who even invited the students for dinner and enjoyed conversations.

1. はじめに

2016年10月、沖縄県の米軍訓練場内のヘリパッド建設に反対・抗議する人々に対し、大阪府警の機動隊員が「土人」・「シナ人」と侮蔑した事件は、いまだ記憶に新しい。2016

年 11 月 18 日付け沖縄タイムスの記事「『土人』発言から 1 カ月 波紋広がる沖縄」によれば、正確にはそれは「触るなくそ、どこつかんどのんじゃボケ、土人が」・「黙れ、こら、シナ人」というものである。この二つの発言に対し、当時の沖縄県知事は「言語道断で到底許されない」と厳しく非難するとともに、沖縄県警も、「差別的用語で不適切」と認め、「極めて遺憾」と謝罪している。

また同記事によれば、

「土人」発言は、1903 年の内国勸業博覧会の会場で沖縄県民が「土人」として「展示」されるなど、繰り返される「沖縄差別」の史実を想起させた。「シナ人」は中国人を指す言葉で、日中戦争以降、日本側が侮蔑を込めて使用したため、中国側が差別的用語としている。

という。

“土人”は、語彙そのものとしてはけっして新しいものではないようであるが、歴史的背景からすれば帝国主義・植民地主義の象徴である。いやむしろ、皮肉を込めてコロニアリズムの特産品ということもできよう。上記の人類館事件のほかに、帝国日本が 19 世紀後半に北部の島々を領有・植民地化し、同地に暮らしていた異民族を“蝦夷人”から“土人”に呼び替えていったことにも、土人概念の歴史的意味が表れている。こうした歴史性から同概念が歴史学やポストコロニアル批評を中心に活発に議論されてきたことは言を俟たない¹⁾。

本論で分析する東亜同文書院「大旅行」調査の調査日誌『大旅行誌』でも、“土人”という用語は、“シナ人”とともに普通に使用されており、さして珍しい表現ではない。とくに仏領インドシナ方面の『大旅行誌』では、「安南土人」という言い回しがあたかも定型句であるかのように用いられている。その点、『大旅行誌』シリーズの前文における愛知大学学長（当時）の言葉、すなわち「当時の風潮を反映して、中国や中国民衆に対する差別的な表現が散見される」（東亜同文書院編、2006）という断りは、対象を広くアジア東部にまで広げて書き直されるべきであろう。

本論の目的は、仏領インドシナ方面の『大旅行誌』における土人像を検討することを目的にしている。仏領インドシナを訪問した日誌の中でも、1920 年に調査を実施した第 18 期生の三つの班、とくに雲南四川班に焦点を当てて分析を行う。同班は、華南沿岸部から仏領インドシナ北部を通過し、雲南四川地方を抜けて上海に戻るというルートをとっており、書院生の土人イメージを仏領インドシナと中国に分けて比較することが可能だから

1) たとえば（川村、1993）や（小熊、1995）、（中村、2001）、（小森、2001）など。

である。

以下では、まず雲南四川班の記述について解説し、その上で彼らの“土人”の記述に見出すことが可能な土人像について順に論じてみたい。

2. 雲南四川班の調査概要

雲南四川班のメンバーは、千原楠蔵、森利嗣、山根正直の三名である。千原は後に朝日新聞記者になった人物だと思われる。班名にあるように、彼らの調査目的地は雲南四川という中国南西部であり、それは同班の調査日誌のタイトル「滇雲蜀水」にも表れている。彼らは日誌の冒頭部分で、次のように行程をまとめている²⁾。

思へば慕かしき昨夏の大陸の放浪、旅程浩々足跡三國の領土に跨り、中華の山河は十省に及び征途蜿蜒五萬支那里、曆日を閲すること一百三十有九日、時に滇嶺の雲を御し、時に蜀原の水を呼ぶ、業を名けて滇雲蜀水と云ふ。(大旅行誌第13巻：1)

より詳しく記すと、同班の主な経過地と期間は1920年7月8日に上海を出発、その後順に香港、広州、ハイフォン、ハノイ、ラオカイ、蒙自、昆明、叙州、峨眉山、成都、重慶、沙市、漢口をたどり、11月18日に上海に戻るというものであった。華南沿岸部を南下しハイフォン・ハノイに入るという経路は、南方方面を調査した書院生にとって、ごく普通のルートだった³⁾。

7月18日にハイフォンに到着した同班は、ハイフォン港の船上で入国を待つ間に、小舟で「麪」を売りに来た現地人を、「歯を黒く染め唇を赤くした安南の土人」(ibid. : 13)と描写している。書院生にとって、ビンロウを噛む習慣やそれによって色が変わった口元はエキゾチックなものとして映ったようで、言及は珍しいものではない。

入国後彼らを港で出迎えたのは、日本人旅館の「土人」の使用人であった。

十九日 晴、早朝黒瀬旅館より安南密人を遣して舢舨で迎へに来る。石山旅館からも同じく土人を遣こす其の他有象無象の客引が来るわ来るわ客の奪合ひ、荷物の横取りで、海防港頭時ならぬ混雑を呈する。(ibid. : 13)

2) 以下の本論の引用箇所にて、『大旅行誌』シリーズにかぎり(大旅行誌 巻番号：ページ数)というように出典を記している。また、『大旅行誌』には誤植や誤字脱字が多い。本論では原文に忠実であるために、すべての引用を「原文ママ」としている。

3) 東南アジア方面の「大旅行」調査の全体像については(加納, 2019)を参照されたい。また、仏領インドシナとくハイフォンにおける調査については(湯山, 2006)が参考になる。

黒瀬旅館の使用人の「安南蜜人」は、「石山旅館からも同じく土人」とあることから、「安南土人」の誤植だと思われる。いずれにしても、たとえお遣いという身分だとしても、仏領インドシナの一大港湾都市でそれなりの都市生活を送っていたと想定できる人物にも「土人」という言葉が与えられる点は注意に値する。次章で述べる、フランス兵を率いた「土人兵」と同じタイプの“土人”である。

その後ハノイに移動した同班一行は、ハノイ市郊外の視察中に「土人」の存在を見出している。

後辞して佛爾西の警察を訪れ、明日の康海行きの手續を了し一同國眼氏の案内で郊外一里を隔つるラクトライ公園に遊だ、沿道に護謨樹、檳榔樹等あり、其の間に點々たる土人の家屋、物賣りの姿等一つとして南國情緒を漂し平和の有様を見せて居らぬはない。(ibid. : 14)

ここでは「土人」がゴムの木や檳榔樹とともに、彼らが見た「南国情緒」漂う風景を構成する記号となっていることが分かる。

つづいてハノイ市街の見物に出た彼らは、こんどは「土人」の信仰に言及している。

宿屋の番頭大塚氏の案内で市中を見物す。熱帯植物繁茂旺盛を極むるジャルデンボタニック、土人崇拜的なりと云ふ佛陀の廟等を見て博物館を參觀した此の館規模小ながらよく土産を蒐集して見るに値す。(ibid. : 15-16)

「土人」の信仰が仏教だという点には、いささか違和感を覚える向きもあるかもしれない。今日コロニアリズムの表れとして学術的な分析の対象となる土人イメージは、仏教のようないわゆる世界宗教を信仰する者というよりも、むしろアニミズム的・呪術的な邪教に従う未開の野蛮人のようなものだからだ。

書院生らが「大旅行」調査で目にした仏教は、たとえ日本以外の仏教と違いがあるとしても、そう奇異なものに映ったとは思えない。けれども、別稿で論じたことがあるように(岩田、2017)、実学性の強い高等教育を受け、調査中ももっぱら近代的なインフラに関心を向けていた彼らからすれば、たとえ馴染みのある文化要素だとしても、それは前近代あるいは半近代の象徴と映ったのかもしれない。

同班一行は、ラオカイを経て中国内へと進む。以下は、温泉を堪能する機会に恵まれたときの記述だ。

温泉は縣城より二千尺位の高所にあり五ヶ所から湧出してゐる只遺憾とするは都を離

ること大にして遠き故浴客の少きこととす、掬飲するに妙味あり。土人は之れを飲料に供すと云ふ、案内者のすゝむる儘に一行は七日間の疲れを温泉に流し去つた。
(ibid. : 25)

今日でも日本では飲泉が一般的ではないが、当時もそうであったことが伺われる記述である。ここで飲泉の習慣を持つ人々に使われている「土人」という言葉は、皮膚の黒い野蛮人といった南洋土人的なものとは考えにくい。むしろ、現地の大衆・庶民といった意味と考えたほうが妥当であろう。

同じような大衆・庶民という意味合いの「土人」は、その後の記述にも表れている。温泉の後、彼らは8月21日に紫牛坡という村を訪れ、翌8月22日に湯丹へと進み、現地の人々の歓待を受けている。

まず紫牛坡では、とある農家に宿泊させてもらっている。その主人は「中々の好々爺で、昔話に花を咲せた」という。「一家揃ふて歓待された」滞在は心に残るものだったようで、「實に純な彼等の生活が羨ましい」とまで記している (ibid. : 26)。

つぎに湯丹では、農家から一転、「銅山王趙氏」の家に三泊「居候」している (ibid. : 27)。

夕食には雲南を出て見たこともない食った事ともない御馳走になる、此の地で純支那人の心情は味はれる亦神戸や大坂や上海邊に居る貪欲飽くなき支那人を以て凡ての支那人と思つてくれるな、純な支那人は大部分だから。(ibid. : 27)

フィールドで学ぶ意義の一つに現実の多様さ・複雑さを体験することがあるとすれば、この記述は彼らのフィールドワークの成果として解釈することができるかもしれない。さらに彼らは近くの廟で「異國人を同胞の如くもてなし」(ibid. : 27) という歓待も受けている。

彼等の心情は熱心に異國人を同胞の如くもてなし、話の如きの銅山の隆盛を計る眞の誠心より發するものが多い、明日は東川に歸る事に決定一夜に別れを惜む會談は夜の更けるのも知らなかつた。(ibid. : 27)

このように会談は大いに盛り上がったようだ。ちなみにその会場となった廟の記述では、ハノイの記述で引いたような「土人の崇拜」といった表現は見られない。

むしろ「土人」という用語が表れるのは、以上のような現地人からのもてなし、現地人とのふれあいを経験し、名残惜しく紫牛坡と湯丹を後にする場面である。

湯丹銅山に別れを告げたのは朝八時である土人は我等が山を下つて見えなくなるまで送つて下れた。かくまで我等を歓迎した心中は感謝と深い印象とに低徊去る能はぬのがあった

その直後、急流に差し掛かり「昔の大井川を渡る様に土人の背に負はれて渡る、ヘルメットを被つて東海の健兒も目を閉ぶって土人の背にしがみついて二十年の昔の嬰兒の様に寝る眞似をしてゐる、可愛子供になつて仕舞ふ。(ibid. : 27)

この「土人」とは、どのような人々であろうか。ピンロウで口を赤くした黒い肌の異人種というより、単に現地の人間と考えたほうが適当なのではなからうか。もちろん、1898年の悪名高き「北海道旧土人保護法」から22年経ち、1903年第5回内国勸業博覧会で発生した人類館事件からすでに17年経過していたことを思うと、この「土人」という用語に差別意識を見出さないほうがおかしい。けれどもその一方で、この記述における「土人」に、帝国日本が推進したコロニアリズムを象徴する土人とはいささか異なるものを見出すことも十分に可能なのではなからうか。

この後の調査日誌で「土人」が現れる記述は他に二箇所あり、いずれも現地の農民といった意味合いの“土人”である。

九月二十六日 晴朗、天氣晴朗。平坦な道を七十里歩いて土門舗に着す。

今日は中秋節である、土人は皆月餅を食つたり御祭りの準獵をしてゐる (ibid. : 39)

ここでも「土人」が、先の飲泉に言及した箇所と同様に生活習慣を説明する上での民族のカテゴリーとして用いられている。

二つ目は、この調査日誌の中で「土人」が現れる最後の箇所であり、彼らが「成都へ成都へと上海を出る時から夢にも忘れなかつた成都」(ibid. : 43) を目指す場面である。

土人曰く此頃は成都の城内は四時頃から閉ぢるので城内は入るを得ないと云ふが成都迄行かねば金がない、だから平坦な道を月を戴いて進む。(ibid. : 43)

果たして城門はやはり閉ざされており、入場することができない。一行は「上海を出発して八十五日雲南省城を出て四十二日、山又山谷又谷を越へて而も絶食迄して來たのにこの不運に合へり」(ibid. : 43) という落胆ぶりで、あえなく「南門外鴻恩旅館に痛恨の涙を呑んで悲痛就床」となつたのであつた (ibid. : 44)。

この箇所で書院生に城内に入れないことを教えた「土人」も、エキゾチックな他者というよりも、むしろ現地の農民層あるいは庶民層を指していると考えらるべきであろう。

3. 大東亜的土人

前章では、雲南四川班の記述における土人像を抜粋し、解説を加えてみた。こうした土人像には、大きく分けて異国情緒の象徴としての“土人”と、現地の庶民としての“土人”という二つの意味を見出すことができるようだ。本章では前者について考察を加えてみたい。

異国情緒の象徴としての“土人”については、「歯を黒く染め唇を赤くした安南の土人」(ibid.: 13) や「南国情緒」を構成する現地人 (ibid.: 14) という記述で確認したとおりである。こうしたエキゾチックな現地人という土人像は同じ 18 期生の他班の調査日誌にも現れる。

四邊を見ると檳榔の實で歯をまつ黒にした土人の娘が椰子の木蔭に屋台店を擧げていろんな果物を賣つてゐるのでパイナップルやバナナを貪り喰つたがその安いことゝ甘味い事とは西江の荔枝と共に忘れ難いものがある。(ibid.: 201)

これはナムディンを訪れた南方移民班による記述である。ビンロウ、土人、ヤシの木陰、屋台、果物とその甘さ…絵に描いたような南国らしさと言っても過言ではない。

次の記述も同じ 18 期生の南方経済班によるものであるが、南方移民班が記す長閑さとは異なり、ここで描かれる「熱帯情緒」は、おどろおどろしさが感じられるものになっている。また、「南洋土人」という言葉が使われている点も興味深い。

汽車は僕等の目に珍らしい風物の中を走つて行く。椰子や檳榔や芭蕉の薄暗く茂つた丘がある。それに熱きつくやうな強烈な日光が照りつけてゐる。ある水邊には檳榔の葉で屋根をふいた柱の長い、恰度彼の南洋土人の小屋を思はせるやうな家があつて、その下の水溜には大きな鵝鳥が浮んでゐる。半裸軀の黒眞い物がうごめいてゐる。——どうしても熱帯情調だ。(ibid.: 458)

これはすなわち、ハノイに向かう列車から見える熱帯地域の景観を、“南洋土人”という彼らにとって馴染みのあるステレオタイプを用いて風景化している、と言い換えることができる。また、「半裸軀の黒眞い物がうごめいてゐる」という描写は、土人表象一般でしばしば指摘される“野蛮で残酷な土人たち”といった猟奇趣味的な視線を思わせるものである。

「アフリカ土人」という言葉が現れるケースも有る。たとえば化学工業及原料調査班は、上海からの船の様子を短く描写する中で、「黒い皮膚のアフリカ土人も交じつてゐた」

(ibid. : 348) とわざわざ言及している。また、南方経済班はハイフォンからハノイに向かう途中の記述を次のように残している。

午後一時四十分慎越鐵道で河内に向つた。汗臭い佛兵が一ぱい乗つてゐる。その中に奇なのは宛も墨のやうな眞黒な顔をした土人兵が佛兵を引率してゐるのがあることである。彼は此頃歐洲の戰場から歸つて来た名誉の戦士ださうな。(ibid. : 457)

いうまでもなくこの「奇」という印象は、本来フランス人に引率されるべき“劣った土人”が逆にフランス人を引率している、という認識から来ている。この「土人兵」が、“土人”という民族のカテゴリー以外のどのようなカテゴリーに同一化されるべきなのかは容易に判断しがたいが、「墨のやうな眞黒な顔」から推測すれば、フランス領アフリカ植民地出身の人間だと考えるのが妥当であろう。

この「土人兵」は、前章で引いた雲南四川班をハイフォンで出迎えた日本人旅館の遣いの「土人」と同じものだと考えることができる。ハイフォンという大都市で働いていたのであれば、“未開の野蛮人”とみなすことはできない。同じように、帝国フランスの軍隊という近代的な組織で一定のポストを獲得している人物であれば、その人はむしろ文明人のはずである。けれども両者に対して「土人」という言葉が用いられている。これは、この土人概念が生活様式の如何に対応するのではなく、皮膚などの外面的特徴に基づくレイシズム的・本質主義的・疑似生物学的な論理に基づくものであることを示している。

“アフリカ人(黒人)／野蛮人／土人”という図式は、周知のとおり後年の『冒険ダン吉』で利用される図式であるが⁴⁾、江戸時代に蘭学を通じてすでに日本に入り込んでいた人種観念でもあった(ヘンリ、2002 : 139-140)。またこの図式は、戦後“マンガの神様”手塚治虫の作品(たとえば『ジャングル大帝』)でも繰り返されたことでもよく知られている。さらに同様の土人像は現代日本社会においても“黒人”やアフリカ系の人々のステレオタイプとして根強くメディアに出現し続けている⁵⁾。

長閑なものであるにしる、おどろおどろしいものであるにしる、こうした土人像は、コロニアリズムに関する研究の中で論じられてきたものである。すなわち“野蛮で未開な土人”は、帝国日本の近代化——文明開化と呼ばれた「自己植民地化」(小森、2001)——において、“文明人”の対照物として次々と析出されてきたのであり、また、この土人像

4) 『冒険ダン吉』のコロニアリズム的性格については(川村、1993)の議論が参考になる。

5) 日本の“黒人”イメージについては、(ラッセル、1991)を参照。たとえばサッカーに関するメディア報道で、アフリカ系の選手に対して、たとえ本人が欧州のトップリーグで高度な戦術を実践しているとしても、もっぱら彼の“強い身体能力”が強調されるというケースも土人概念に通じるものである。対照的に、欧州の白人系サッカー選手の“身体能力”が強調されるケースは圧倒的に少ない。

は実際に教化されて脱土人化を達成できるかどうかは別にして、教化の対象として位置づけられたという分析である⁶⁾。植民地台湾のように、“内地人／本土の日本人：台湾土人／現地漢民族：蕃人／原住民”という三重構造が指摘されるケースもあるが（簡、2015）、これも“文明／日本人と未開／土人”という二項対立の変異である。

そして、帝国日本が“文明”たる自己像を確立するための鏡像として“土人”たちを展示し、一方的な好奇・猟奇の視線に対して物言わぬはずの“土人”側が異議申し立てをしたのが、かの人類館事件であった。それを念頭に置いて書院生らの記述を読むと、人類館的な土人像と彼らの“エキゾチックな土人”というイメージの間の距離が紙一重であることに気付かされよう。雲南四川班と同じ18期生の化学工業及原料調査班は、ハイフォンで現地人を見て、「日本古代の風俗に似た所のある土人は、齒を黒く染めて、唇を赤く彩つてゐる」（大旅行誌第13巻：349）と記している。まるで博物館の民族展示の説明のようだと言ったら言い過ぎであろうか。

先に紹介したように、南方経済班は「南洋土人」という言葉で現地住民がいる景色を表現しているのであるが、それに続く箇所では同じ仏領インドシナの住民を「安南人」と呼んでいる箇所は注目に値する。

仏の植民政策は余りに吸利主義である。彼等は植民地を撫育することを知らぬ。資本家は巴里のオペラの中で青い酒に酔ひながら、植民地の利益を捲きあげて了ふ。従つてその植民地経営に於ても英米のその如き發達を見ない。この河内もやはりその例に洩れない。彼等の資本主義、吸利主義の背後には安南人の未だ爆發せざる怨嗟が蟠つてゐる。彼等安南人の頭が進む従つて仏国に対する反感を比例的に増長させて行きつつあると云ふことを聞いた。また安南人は我等日本人に好意——仏国を怨むと反対に——を持つて居るといふことを聞いた。この為か仏官憲が日本人と安南人との接触を厳しく監視してゐるといふことをも聞いた。（ibid：459）

ここでは「土人」やそれに類する言葉は用いられていない。なぜなら、この「安南人」たちは、「頭」が進んだ人々だからである。「頭」が遅れているのであれば「土人」であり、進んでいれば「安南人」になる——こうした論理は、教化が進めば土人状態から脱することができるとした帝国主義的な土人観そのものであると言っていい。

こうした“土人”は、端的に大東亜的土人と呼んでよいのではないか。すなわち帝国日本が自らの文明化のネガとして作り出し、西洋による植民地支配からの“解放”をうたい、かつ西洋に対抗するための子分にしようと目論んだ人々である。

6) たとえば（川村、1993）や（中村、2001）を参照。

ハイフォンを訪れた多くの書院生が視察した場所に、ホンゲイ炭鉱がある。ホンゲイ炭鉱は、今日世界遺産として知られるハロン湾の近くに位置していた⁷⁾。化学工業及原料調査班は現場で見た光景を、「炭山は露天掘で土人がまつくろになつて石炭を掘り出してゐた」(ibid.: 352)と書き残している。たしかに、この前後に、フランスに搾取される仏領インドシナといった箇所は見当たらない。けれども、同じ仏領インドシナの労働者が社会政治的環境次第で、大東亜の土人の性格がいわゆる大東亜戦争に近づくにつれて強調されていくのは当然の成り行きであろう。先の南方経済班の記述にその萌芽のようなものを見ることができるが、1936年にハイフォンに上陸した第33期生・雲南省遊歴班の記述は著しい。上陸早々、石山旅館で主の黒島氏と「老海防」横山氏から現地事情を聞いた同班は、その思いを次のように記している。

外国資本の投資を極端に防止する仏の保守的植民政策により、肥沃広大なる東京の大原野は、今日尚未智な安南土人の手により耕作されてゐるに過ぎず、其の他幾多の豊富な天然資源を有しながら、未だ何等の開発も見てゐない。我が国の対安南貿易は、仏の禁止の高関税により、我が商品の輸入は殆んど不可能で、貧困の土人達は、数千哩の彼方ヨーロッパより運ばれる高価な商品の購買を余儀なくせしめられてゐる。(大旅行誌第28巻: 492)

(中略)

我々は今此處に、若し將來安南が我が國の勢力下になる時ありと假定するならば——それは他の事情を考慮に入れざれば、武力的に見て、極めて容易なことなのである——我が對支政策は如何に有利になるか……。

歐洲の不安乃至戦争に際して、我が國は徒らに、天然の沃野と未開發の富源と、厭政下にあへぐ安南人とを黙視すべきや、我々は天の使命を感じなければならない……。私には老横山氏の胸中に勃々として湧き立つ赤き血と意氣を感じた。これこそ黙々として我が海外發展の第一線に立つ、日本人の誰しもが抱く心持であらう。(ibid.: 492-493)

圧政に苦しむ「安南土人」を解放すべく、武力で仏領インドシナを勢力下に組み入れる、というこの記述は、日中戦争勃発の前年、仏印進駐の4年前のものである。河西が論じる1941年大本営陸軍部作成の小冊子に記された土人像、すなわち「白人に圧迫されており、それに対抗して日本が解放すべきアジアの民」という土人像が想起される(河西、2016: 137-139)。

7) ホンゲイ炭鉱と仏領インドシナ駐在日本商社との関わりについては(湯山、2013)が詳しい。

この会話は若き書院生にかなりの知的刺激を与えたようだ。彼らはつづいて次のように記している。

果して安南の空が明朗化される日は何時か、それは我々には知る術もない。だが、我交は南の國安南の土地へ上陸第一歩、此の力強い言葉を聞いた時、苦しかった南への旅行の無駄で無かつた事を喜んだ。私は遠く國を離れた日本人の誰もが抱く心意氣を知つたのだ。我々の目には、ぼんやりではあるが、我が國の南方政策——南方へ我が力の伸びゆくべき道が次第に見えて来る様に思われた。(ibid. : 493)

第 33 期生・雲南省遊歴班のものと同じ大東亜的土人は、その後サイゴンを訪れた第 36 期生・タイ国班の以下の記述も見ることができる。

仏蘭西女のそぞろ歩きも緑にはえて美しい。道の砂利は真赤にそめてあって、周囲の緑に浮き出て見える。芝生に入れば罰金だとか、一にも二にも金だ。金にあかした東洋の小パリーの称ある西貢の市は、成る程その建築たるや宏壯、優美である。フランス式の瀟洒たる住宅、夢の様だ。仏印総督の官邸は公園の様だ。だがその陰に軒下に、しひたげられ、絞り取られ、疲れ果てて無智から無智への世界に追ひ込まれ、終には老へる力もなく只僅かに獸的享樂を追つて行く、生ける屍の如何に多く横たはることか。此處西貢は殊に此の感が深い。路傍と言はず、軒下と言はず焼ける胸をひやさんとするか、横たはる黒い土人のうごめきがある。それを踏みつけぬばかりにして白人女のハイヒールが通る。何もかも矛盾だ、顛倒だ。救はるべきものなりや否や？ 眼頭にあつきものを覚える。(大旅行誌第 31 卷 : 353)

さらに同班は、後に訪れたタイにおいて同国が「華僑と白人の素手に圍まれ、ダニに食われ乍らも」持ちこたえていると称えたうえで、「我が頼もしき盟邦として東亜守護の爲に、光榮あるその獨立を維持して頑張つて貰ひ度いものである」(ibid. : 380) と期待をかける文章を残している。

4. 土民的土人

前章では仏領インドシナにおける調査日誌に焦点を当てて大東亜的土人について論じたが、前々章の雲南四川班の調査日誌の解説で見たように、この土人像とは異なるもの、すなわち現地の庶民や農民といった意味の土人像を見出すこともできる。もちろんすでに帝國日本内で起きていた“土人”を巡る事件を思うと、その土人概念に人間集団間に優劣や

良し悪し、美醜を持ち込む差別的な価値観が含まれていなかったと考えるのは無理がある。けれども、その一方で、コロニアリズム的土人でもなく、また単なる文字通りの“その土地の人”でもないようなものを見出すことは十分に可能に思える。

この土人像は、大東亜的土人が仏領インドシナで多く見られるのとは対照的に、中国国内でより頻繁に見られるものだ。またそれに加えて、中国国内での土人記述に特徴的なのが「土民」との併用、そして同じ文脈での「土語」の使用である。雲南四川班は、仏領インドシナでは「土民」や「土語」という言葉を使っていなかったものの、中国国内に入るとそれらを混交して記述するようになる。

一行は、成都から重慶へ移動する途中、米国人宣教師の集団と遭遇し、次のような記述を残している。

彼等は支那子女と共にこの救済事業に當る、意味深かし、途中兵士が土民を逆待するを見て異様の相をなす、彼等外人の目に映したる感や又如何、彼等は茶屋にて吃茶す、極めて土語に精通し土人之を遇する又篤し。(大旅行誌第13巻：53)

もちろん兵士が虐待するのが「民」、宣教師集団を茶で遇するのが「人」だ、と分けることも可能であるかもしれないが、両者に明確な区別を設けることは容易ではない。

「土語」とは、第一に土地土地で使用される言語のことであるが、第二により重要な点として、より一般的な共通語に対する、より個別・特殊的・低次元の方言といった意味合いがあることは言うまでもない。

18期生・化学工業及原料調査班がラオカイで出会った現地在住の日本人女性は、同班一行のために「土人の床屋」相手に「土語」で通訳をしてくれる。そして「来た當時は飛んでも歸りたい位でしたが、住めば都でね。こんな田舎に土人を相手にくすぶってしまふのも運命と諦めて居ます。」(ibid. : 355-356)と語っている。この土語は、フランス語とは対象的な“安南語”あるいはラオカイ一体の現地語のことであろう。

中国国内になると、「土語」は官話に対する現地語を意味することになる。雲南四川班は、四川自流井で北京人の知事と出会い、久しぶりの北京官話での会話を楽しんでいる。

北京語は矢張りよく解る。土語になって肝腎な北京語も台無しにして仕舞ふて、丁度學校の李先生の様に訂正する、仲々の日本通で日本史が詳しく、西郷隆盛や吉田松陰には可成り陽明學から知ってゐるらしい。(ibid. : 61)

この北京語を「台無し」にしてしまった人物は、前後の文脈から考えて書院生というよりも、現地生活が長い知事のことだと推測できるが、いずれにしてもこの下りには“官話と

土語”の関係がよく表れている。

大槻文彦による『言海』の第4版(1891年)には「土人」も「土語」も無く、唯一「土民」のみが「其本土ノ民」(大槻、1891:726)と記載されている。1904年の版では、「土民」の記載に変化が無い一方で、新たに「土人」が加わり、「其国土ニ生マレツキタル民」(大槻、2004:717)と説明されている。「土語」は無い。

「土民」よりも「土人」が新しく、かつ「国土」という意味が使われている点は、たとえ“土人”という言葉が江戸時代から使用されていたとしても、この語彙が国民国家的な近代性をはらんでいたことが伺われる。国民国家制度の広まりが一般的に植民地支配の展開と表裏一体のものであったことは指摘するまでもなからう。

けれども、たしかに土人語彙の一般化をナショナリズムが後押ししたのが事実であるとしても、ここでの論じている土人像が、帝国日本が近隣諸国・諸地域に見出した大東亜的土人といささか異なっている点は否定できない。この「土人」たちは、書院生たちがゆく先々で出会った各地の農民層・庶民層ではあるが、そこでポイントとなるのは近代文明の欠如ではなく、むしろ洗練の対極にある素朴さもしくは粗野のようなものである。そこで教養の有無が問題になったとしても、その教養は世界の分割を推進した西洋近代的な知ではなく、むしろ北京官話のような中央的知となる。

すでに19世紀には複数の辞書の中で中国語の口語に共通語としての官話と地方の言語があることが指摘されており、後者に対して「土語」のほか、「土話」や「土談」、「郷談」、「土音」などの語彙が当てられていた(中国社会科学院語言研究所詞典編輯室、2016)⁸⁾。たとえば19期生に関して言えば、同『大旅行誌』の巻末の各班経過表の使用言語の項に、「北京官話」・「南京官話」のほか、福建語などの他の地域語とともに「雲南土語」などを見ることができるよう、書院生らにとって官話と方言という意味区分はとくに珍しいものではなく、むしろ書院における中国語学修を通じて熟知していたものと考えられるべきである。農民などの庶民層を「土人」と呼んだ背景には、こうした区分があったと想定できる⁹⁾。

以上の議論から、18期生の書院生らが行く先々で出会った現地の庶民層を描く上で用いた土人像を、土民的土人と呼ぶことにしたい。土民的土人は、大東亜的土人のような“白人に支配・搾取される非白人人種”とは異なるものである。言い換えれば、近代文明に対する未開の存在として統治・教化の対象となる人々なのではない。

また、土民的土人は、不潔、黒さ、怠惰、粗暴、迷信という属性が強調して描かれると

8) 本学国際コミュニケーション学部塩山正純氏のご教示による。

9) そうであるとすれば、書院生の記述における“土人”と華夷秩序的な性格の関わりが気になるところであるが、その関係性については今後の課題としたい。中国の華夷秩序的な人種観念については(坂元、2005)を参照。

いうわけではない。たとえば“不潔な汚い土人”といった現地人イメージが帝国日本におけるレイシズムの表れとして指摘されることがある¹⁰⁾。けれども、雲南四川班の記述で見たように、土民的土人に関しては不衛生さが強調されるわけではない。また、土民的土人は、奇異で珍奇なエキゾチックな他者、展示の対象として猟奇的な眼差しにさらされる劣等人種なのでもない。

むしろ、雲南四川班を歓待したことが示すように、土民的土人は、たとえ粗野な人々だとしても、むしろ同じ人間として友好的な交流が可能な範囲内にある。土民的土人はその字義通り、統治する側に対する統治される側という階層的なニュアンスがある「民」と、未開人・日本人・安南人・黒人といった属性や状態を意味する傾向が強い「^{じん}人」の混交体と言えるのかもしれない。

5. おわりに

以上本論では、仏領インドシナ方面の『大旅行誌』における土人像を検討することを目的に、第18期生の三つの班とくに雲南四川班に焦点を当てて議論を進めてきた。書院生らの記述から分かるのは、一口に「土人」と言っても、そこに見られる土人像には相違点が見受けられるということであり、本論ではそれを大東亜的土人と土民的土人とに分けて考察した。

大東亜的土人は、中国の記述と比べて仏領インドシナのそれに多く見られるものであり、かつ、帝国日本のアジア進出・侵略や大東亜共栄圏構想の中に表れる土人イメージと同じタイプのものである。大東亜的土人は、文明の対極の未開、言い換えれば自らのネガとして帝国日本が周辺諸国・諸地域に見出したエキゾチックな人種的カテゴリーであり、帝国日本によって展示され、教化され、解放されるべき存在である。

それに対して土民的土人は、中国での記述に多く現れるものであり、単に一つの人種的カテゴリーというよりも、現地の庶民や農民といった階層的なニュアンスが感じられるカテゴリーとなっている。それは、大東亜的土人が位置づけられる“文明対未開”という二元論ではなく、むしろ“洗練と粗野”という二項対立を当てはめると理解しやすいかもしれない。

こうした土民的土人と類似した土人像は、たとえば夏目漱石が1909年に満州方面を旅行し朝日新聞に連載したエッセイ『満韓ところどころ』や、芥川龍之介が1921年の中国旅行をもとに1925年に刊行した『支那遊記』でも確認できる。『満韓ところどころ』では、山の名前を「土人」に教えてもらっており（夏目、1909）、芥川の『支那遊記』では揚子

10) たとえば（小森、2004）。

江を下る筏を操舵する「雲南貴州等の土人」について言及がある（芥川、2015）¹¹⁾。

しかしながら、大東亜的土人と土民的土人という二つの異なる土人像が「土人」という同じ語彙を使って表現される点は再度強調しておく必要がある。たとえば川村は、武田泰淳の作品を引いて、「土に生きる民」の文化を持つ「土民」と「日本が侵略者、植民者として見ようとした文化なき『土人』」とを対比させているが（川村、：134-135）、書院生らの記述にあるように、むしろ“土民”と“土人”が互換的に用いられる点が重要だと言えよう。

本文中でも何度か述べたように、帝国日本の拡張から崩壊に至る過程の中で“土人”が果たした役割を想起すると、“土人”と“土民”を区別して後者に免罪符を渡すよりも、両者の共通点と相違点について論じる必要がある。言い換えれば、本論で大東亜的土人と土民的土人とに分類を試みたように、近代を構成する差別の図式を複数のものとして理解することが重要なのではなかろうか。

最後に、『大旅行誌』における土人概念の研究について、いくつか課題を述べたい。第一が、より多くの『大旅行誌』に当たり、土人語彙の地理的分布や歴史的な推移を解明することである。本論では触れなかったが、フィリピンを訪問した班の調査日誌にも都市部で暮らす“土人”が頻繁に登場する。一方で、いわゆる辺境地帯の調査日誌に“土人”が現れることも珍しくない。また、注釈で言及したように、土民的土人と華夷秩序的な人種概念の関係も気になるところである。さらに、“シナ人”などの他民族名称との比較分析や、同時代の旅行記・旅行案内書・地誌・新聞記事における土人概念の比較分析も軽視できない。

こうした研究によって、近代日本における差別の多様性・複層性の理解がいつそう深まるものと期待できる。本論はそのささやかな一部である。

【付記】：本稿は、科学研究費補助金・基盤研究（C）「近代日本青年の「南方」体験：中国人コミュニティとの接触の実像」（課題番号：15K01896）および愛知大学人文社会学研究所「南方における近代日本青年の足跡」研究会による成果の一部である。記して御礼申し上げたい。

参考文献一覧

芥川龍之介 2015『支那遊記』MUK production。

岩田晋典 2017「大調査旅行における書院生の台湾経験：“近代帝国”を確認する営み」加納寛編『書院生、アジアに行く：東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア（愛知大学東亜同文書院大学記念センター叢書）』あるむ。

11)『満韓とところどころ』は第33章、『支那遊記』は「長江遊記」の第二節「遡江」。

- 小熊英二 1995『単一民族神話の起源：〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社。
- 加納寛 2019「東亜同文書院生が見た仏領インドシナの日本人：1910～1939」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明 21』第 42 号。
- 河西晃祐 2016『大東亜共栄圏：帝国日本の南方体験』講談社。
- 川村湊 1993「大衆オリエンタリズムとアジア認識」川村湊・他編『岩波講座 近代日本と植民地 7：文化のなかの植民地』岩波書店。
- 簡中昊 2015『近代日本の台湾原住民認識：作家たちが見た「野蛮人」』総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻・博士（学術）学位申請論文。
- 小森陽一 2001『ポストコロニアル』岩波書店。
- 小森陽一 2004『レイシズム』岩波書店。
- 坂元ひろ子 2005「中国史上の人種観念をめぐって」竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う：西洋的パラダイムを超えて』人文書院。
- 中国社会科学院語言研究所詞典編輯室 2016『現代漢語詞典（第七版）』商務印書館。
- 中村淳 2001年「〈土人論〉—『土人』イメージの形成と展開」篠原徹編『近代日本の他者像と自画像』柏書房株式会社。
- 夏目漱石 1909『満韓ところどころ』Amazon Services International, Inc.。
- ヘンリ、スチュアート 2002『民族幻想論：あいまいな民族 つくられた人種』解放出版社。
- 湯山英子 2006「東亜同文書院生の仏領インドシナ調査旅行」『植民地文化研究』第 5 号。
- 湯山英子 2013「仏領インドシナにおける日本商の活動：1910年代から 1940年代はじめの三井物産と三菱商事の人員配置から考察」『経済學研究』62(3): 107-121 頁。
- ラッセル、J・G 1991『日本人の黒人観：問題は「ちびくろサンボ」だけではない』新評論。